

俵IVFクリニック 命の誕生を チームワーク看護で支える

女性の社会進出などによる晩婚化の影響もあり、不妊の悩みを抱える人が増えている。

不妊治療を通して、新しい命の誕生を支える俵IVFクリニック(俵史子院長、静岡市駿河区)看護師3人の奮闘ぶりを紹介する。

<企画・制作/静岡新聞社営業局>



◎新分野の医療に手応え

櫻井さんを看護の道に進ませたのは、リウマチを持つ母親の家事を手伝った経験だった。「母を姉と二人で支えているうちに、助けを求めている人の役に立ちたいと思うようになりました」と初心を振り返る。

しかし、看護を続けていくと、救えない命を看(み)取る経験の連続が心の重荷になる。



看護師

さくらい ようこ
櫻井 洋子さん

櫻井さんは看護の仕事を続けたかったからこそ、7年前にいったん職場を離れることにしたという。

アロマテラピーの看護への応用などを学んでいたとき、以前、静岡市内の総合病院で一緒に働いたことのある俵院長に再会。「命を育む医療を一緒に広げよう」と誘いを受けた。「多くの不妊患者さんは待合室で赤ちゃんを抱えるお母さんの姿を見ることが心理的な負担になるのですが、一般病院での配慮はまだ十分ではありません。クリニックに入って驚いたのが、患者さんのプライバシーを重視した治療方針と施設でした」。櫻井さんは専門性の高い医療に、看護の新天地を見いだしたという。

晩婚化により、妊娠しづらい年齢から治療を始める患者が増加している。治療は高度化し、診療時間内では患者に治療のすべてを理解してもらうのが難しい場合も少なくない。櫻井さんは「患者さんの表情を読み取り、カ

ウンセリングルームで補足説明をしたり、仕事と治療の両立や家族との関係など、医師には話せない悩みを引き出して解決の糸口を見つけたりするのも看護師の仕事です」と役割を説明する。

不妊の原因は男女それぞれにあるにもかかわらず、問題を女性にばかり押し付ける社会的風潮が根強く残っていることを櫻井さんは問題視する。「不妊の原因が自分にあるのではと自責する方も多いのですが、こうした心理的ストレスは治療に逆効果です」。日本不妊カウンセリング学会認定体外受精コーディネーターの資格を持つ櫻井さんは同様の立場から患者の心の重荷を軽減していくという。「大切なのは患者さんの訴えをまずは受け止めることです。判断をせず『傾聴』することで、深く理解し、気持ちを寄り添わせることができます」。

クリニックでは患者が妊娠し、出産施設へ紹介できた時期を「卒業」と呼ぶ。「不妊治療



は患者さんの「卒業」に向かってスタッフが「丸」となつて取り組むクリエイティブな世界です」と語る櫻井さん。志した看護の道に確かな手応えを感じている。

◎適齢期に産める社会を

大川さんは総合病院での勤務の後、クリニックに転職。7年目を迎え、現在はサブチーフとして診療部長の補佐をしながら、スタッフを取りまとめている。

病気の大半は、より専門性の高い治療を受けるため、クリニックが総合病院を紹介



看護師・サブチーフ

おおかわ ともこ
大川 知子さん

介するが、不妊治療の分野はクリニックの医療レベルの方が高い場合もあるという。「不妊治療という限定的な分野が対象なので、より高度な知識を得ることができます」と話す大川さん。

不妊治療では産婦人科系の知識や経験に加え、患者の大半である女性が抱える不安を理解し、信頼関係を築くといった精神面のケアも重要だ。大川さんは「産みたいという気持ちは共通でも、夫や家族のサポートなど、置かれている事情はさまざまです。不妊治療に携わる看護師は、担当する患者さんに合わせて伝え方を工夫しながら、正しい食生活など症状の改善に役立つ医療サポートを提供します」と説明した。次の治療に進むべきか悩んでいる患者には、治療が身体に及ぼす影響などを同性の立場から詳しく解説しているという。

◎不妊看護のプロ育てる

1994年から授乳に関する悩みを抱える母親を対象にした「母乳相談室」を静岡市内で開設し、授乳トラブルや子育てのサポートを続け、その後総合病院の産婦人科病棟で看護師長を務めてきた福田さん。「助産師として活動してきた中で、不妊治療は産婦人科の一部という認識だったのですが、このクリニックに転職し、不妊治療の専門性の高さに驚きま

したと振り返った。

不妊治療の分野では看護師や培養士(顕微授精や体外授精などを行う医療技術者の技術も治療結果に大きく影響する。当クリニックでは、学会での発表にも積極的に参加する



看護師・診療部長

ふくだ じゅんこ
福田 純子さん

ほか、知識向上を目指す看護師を海外の学会に参加させています。キャリアサポート体制の充実が、治療技術向上につながるからです」と人材教育方針を語る。

「産みたい」という思いは共通していても、実際の課題は患者ごとに異なる。患者は医療スタッフとプライベートな事柄まで共有することになるので、治療期間中は同じ看護師の担当を望むケースもある。適した担当者を調整するのも福田さんの仕事だ。「看護師のスキルレベルの差は、チーム全体でサポートして万全を期しています。その上で、スタッフの個性を尊重し、患者さんとの『ベストマッチ』を探しています。現場で浮かび上がった課題などは定期的なミーティングの場でスタッフ全員が共有。ペテラン看護師の立場から改善へのアドバイスも行っているという。

同クリニックは定職率向上にも力を入れている。「一般病院勤務と異なり、クリニックには夜勤がありません。シングルマザーや、家族の介護をしている看護師もいますが、家庭の事情を優先させた勤務シフトを組むことで、安心して長期間働いてもらえる環境づくりに心掛けています」と気配りをのぞかせた。

子どもが欲しいという要望は、夫婦にとつては自然な願いだ。「同じ女性としての思いを

少子高齢化が進む中、年齢と妊娠しやすさとの相関関係を重視した社会制度を整備すべきという議論が起こっている。大川さんも妊娠適齢期に関する知識を中高生など若い年代にもっと広めるべきだと語る。「看護学校でさえも以前は、妊娠の仕組みは教えるものの、妊娠適齢期についてはあまり触れませんでした。治療技術は向上していますが、生物学的な現実の壁も存在することを社会全体で受け止め『産み、育てやすく、働きやすい』社会の仕組みづくりに取り組むべきではないでしょうか」と訴える。患者の悩みを分析すると、治療に対する夫の関与と、通院などへの会社の理解もさらに深めるべきだと感じているという。

同クリニックは3月に移転し、治療規模を拡大する予定だ。待ち時間短縮のため、電子カルテの導入など業務の効率化



かなえて差し上げたいという気持ちで仕事に取り組んでいます。「命の誕生を願う一生懸命に取り組む患者さんのため」という大原則に立ち、患者さんの思いに寄り添う看護を目指しています」と看護方針を語る。

治療が望ましくない形で終わっても看護師の仕事は完結ではない。「十分な治療を受けたので悔いはない、と実感していただくことが、患者さんとその家族が人生をポジティブに送るためには重要です。不妊治療の看護に携わると、知識に加え、人としての成長も期待できます」とクリニックでのやりがいを強調した。

現役看護師のキャリアアドバイス

チームワークで取り組む看護の基本は情報共有。小さな情報が大きなミスを防ぐことに繋がります。気が付いたことを積極的に発言すれば先輩が適切に対応してくれます。

福田さん

初心忘れるべからず。対応に慣れは禁物です。人生や背景はそれぞれなので、目の前の患者さんとしっかり向き合いましょう。

大川さん

患者さんとの対話で役立つのが自身の体験談。日ごろから健康を気遣った生活を送り、自身の体調変化を意識しましょう。

櫻井さん

を目指すという。「これまで培ったチームワークを生かして、より多くの患者さんに、レベルの高い治療を提供したい」と語る大川さんも移転準備に追われる毎日だ。

